気分で行う株式投資

あなたが株式投資家であるとして、手元に一株 1,000 円で買ったＡ社の株 1,000 株と同じく一株 1,000 円で買ったＢ社の株 1,000 株があるとします。共に１年前に買ったのですが、Ａ社の株は 1,200 円に、Ｂ者の株は 800 円になっているとします。今、あなたは証券会社の担当者から現在 1,000 円の株価のＣ社の株の購入を、1 年以内に 3 割の株価上昇が見込めるとすすめられ、買いたくなっています。手元資金は殆ど無いとします。どうされます？

殆どの人はＡ社株を売って、その代金でＣ社の株を購入すると思います。
「それって、どうよ？」とばかりに損得を試算してみました。

図表　株式売買の損益試算

単位：円、千円

	購入@	現在@	A売却、C購入	B売却、C購入	売買なし
A社	1,000	1,200	0	1,200	1,200
B社	1,000	800	800	0	800
C社	―	1,000	1,000	1,000	0
売却損益			200	−200	0
売却益課税			−40	0	0
計			1,960	2,000	2,000

注：売買手数料等は除外

要するに税金の分だけ損が出ることになります。さらに冷静に考えると、多くの場合、Ａ社、Ｂ社の株価の変動は振り返って考えればそれなりの理由があり、現在もその延長線上にあると考えられますのでＢ社の株を売って、Ａ社の株を継続保有する方が合理的だと考えられます。
Ｂ社の株価が損を埋めて、利益を生むには相当な時間が必要でしょう。

もう一つ、Ｃ社株の購入を断念するという選択肢もあります。この場合もＢ社株の含み損を抱えて「何時か、上る時もあるさ」と平気を装いながら、イライラ､クヨクヨとした精神衛生上悪い状態が続くことになります。加えてＣ社株購入を断念した決断力の無さが悔やまれます。

投資家に限らず、なぜ、ほとんどの人が冷静に判断できないかと言えば、「損」を顕在化させたくないという理性を超越した「見えざる手」が判断を誤らさせているということになります。「見えざる手」は嫌な気分を味わいたくないという気持ち・気分の問題です。

「見切り千両、損切り万両」

Ｃ社の株の購入を決めるに至った理由は何かと問われれば、証券会社の担当者の勧めとＢ社株の含み損を取り戻したい、儲けたいという欲と焦りが理性を失わせたことに尽きます。

イノベーションに対する取り組み・投資も、案外、気分に左右されているのだろうな、などと考えたりしています。

ベンチャーもイノベーションも失敗や損することばかり気にしていては、踏み出せないと分かってはいても「見えざる手」が邪魔しているのでしょう。